

大正・昭和初期における、いわゆる「ライト式」の用語の使用について

THE APPEARANCE AND EVOLUTION OF THE USE OF *WRIGHT-SHIKI*
IN JAPAN'S ARCHITECTURAL LEXICON IN THE 1920S

井上祐一*, 初田 亨**, 内田青蔵***

Yuichi INOUE, Tohru HATSUDA and Seizo UCHIDA

The term *Wright-Shiki*, or Wright Style, first entered Japan's architectural lexicon in the Taisho (1912-1926) and early Showa (1926-1989) eras. This paper examines the evolution of the 32 similar terms that were used between 1919 and 1930. At first, *Wright-Shiki* referred only to Wright's designs, the style of the Imperial Hotel, and the works of Wright's apprentices in Japan. Gradually, however, it came to represent a studied imitation of Wright's architecture, or of the use of materials he frequently used. Finally, by 1926, only two of the terms - *Wright-shiki* and *Wright-fu*, or Wrightian - had survived, suggesting that the characteristics of Wright's architecture had already become an accepted term.

Keywords : *F. L. Wright, Arata Endo, Wright-Shiki, Imperial Hotel, Kikutaro Shimoda, 1920S*

フランク・ロイド・ライト, 遠藤 新, ライト式, 帝国ホテル, 下田 菊太郎, 大正・昭和初期

はじめに

帝国ホテルをはじめ、計画案を含む13件の業績¹を日本に残したフランク・ロイド・ライトが、当時のわが国の建築界に強い影響を残したことは、よく知られている。また、大正後期を中心に、いわゆる「ライト式」建築が、流行したことも周知のことである。

ライトの建築は、水平線の強調や凹凸の多い平面形あるいは左右対称の平面形などが特徴として知られている²。

また、ライトについては、『建築雑誌』大正3年6月号に、「新論新説」の記事として『The Architectural Record, May, 1914 (米)』を取り上げ「In the Cause of Architecture. By Frank Lloyd Wright. 建築なるものゝ本源に就手自己の所信を述べたるものにて Style と云ふ事にも言及して居る。」³と紹介されている。あるいは、『建築雑誌』大正3年7月号には、岡田信一郎が「新建築の意義(演説)」という表題で、「亜米利加で新建築に優俊なるフランク・ロイド・ライトと云ふ人があります、其人が『自分は過去の伝習に忠実ならん為に過去の伝習を打破せんとす』と云っていますが、是は決して堅白同異の辨ではない、其言葉通り解釈して差支えないと思ひます。」⁴と、ライトを引き合いに出して「新建築」を語っている。

しかしながら、「ライト式」「ライト風」等の呼び名が、いつ頃から使用され始め、また、どのような意味を持って使用されていたのかについては、あまり明確にされていない。あるいは、いわゆる「ライト式」の用語がどのような意味を持って使われていたのか、ほと

んど明らかでない。本稿では、いわゆる「ライト式」について、どのような用語をもって使用されていたのか、その用語の意味と、使われ方の年代の変遷について考察する。

なお、考察にあたっては、当時の建築雑誌『建築雑誌』『建築新報』『建築評論』『建築世界』『建築と社会』『住宅』『建築画報』『新建築』などを主な資料とした。また、いわゆる「ライト式」の用語は、ライトが設計した帝国ホテルの出現とともに現れたと考えられるので、大正元年以降昭和初期までについての資料を対象として用いた。

1. 「ライト式」の用語の出現

当時の雑誌に見られる「ライト式」の用語、もしくは「ライト式」に準ずる用語について、使用年代順に並べたものが、[表1]である。

「ライト式」の用語が使用された最初の論文と考えられるものに、建築家下田菊太郎⁵が帝国ホテルについて述べたものがある。帝国ホテルの起工(大正8年9月)⁶の前の『建築新報』大正8年8月号⁷に使用されたもので、下田は、次のように述べている。

「予輩の不可解なるは帝国第一のホテルに日本もしくは欧米の様式に抛らずして、一個のライト式に抛らんとすることである。」とし、ライトの作風は、サリバンがいたことのあるフィラデルフィアの事務所の「ヒウキト」⁸が用いた「近東式を加味」したものが最初であり、「ライト氏は第三代目の採用者で住宅に初めて用ふるに至り、今は広くライト式とでも云ふ様になった」と、ライト式について述

* 文化女子大学短期大学部生活造形学科 助教授

** 工学院大学工学部建築学科 教授・工博

*** 文化女子大学造形学部住環境学科 教授・工博

Assoc. Prof., Dept. of Living Arts, Bunka Women's Junior College

Prof., Dept. of Architecture Faculty of Engineering, Kogakuin University, Dr. Eng.

Prof., Dept. of Dwelling Environment, Faculty of Art and Design, Bunka Women's Univ., Dr. Eng.

べている。

[表1]いわゆる「ライト式」の用語について

年 月号 誌(紙) 名 執筆者	用語	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)	(11)	(12)	(13)	(14)	(15)	(16)	(17)	(18)	(19)	(20)	(21)	(22)	(23)	(24)	(25)	(26)	(27)	(28)	(29)	(30)	(31)	(32)
		ライト式	恩師ライト氏の創案	ライト氏の流れを汲んだ建築	ライト派建築家	ライト屋	ライト式建築	ライト張り	ライトの風貌	ライトの様式	ライト氏流	遠藤氏の創作	ライトまがい式	帝国ホテル式	遠藤氏の様式	遠藤氏の型	ライト式の建築	ライト擬ひ建築	正真正のライト式の家	ライト風の家	ライト式の板張り	ライト式の住宅	ライト風	帝国ホテルの様式	立体的新建築	立体建築	建築は立体である	立体主義の手法	立体派の手法	立体的有機体	立体的観念の下に設計	立体式	立体式建築
大正 8年 8月号 建築新報	下田菊太郎	○																															
大正 9年 4月号 建築評論	遠藤 新																							○									
大正 9年 7月号 建築評論	山本拙郎																								○								
大正10年 3月号 建築世界		○																							○								
大正10年 6月10日号 家庭週報	遠藤 新																									○							
大正10年12月号 建築世界		○																															
大正11年 6月号 住宅	高島司郎		○																						○								
大正11年 8月号 住宅	高島司郎		○																						○								
大正11年 9月号 建築画報	森口多理																										○						
大正11年10月号 住宅	目白千登作			○																									○				
大正11年10月号 住宅	高島司郎																												○				
大正11年10月号 建築世界					○	○																											
大正11年11月号 建築世界	桜井小太郎						○																										
大正11年11月号 建築画報	三浦元秀	○						○																									
大正12年 1月号 住宅	高島司郎																														○		
大正12年 4月号 住宅	高島司郎																									○						○	
大正12年 6月号 住宅																																○	
大正12年 6月号 住宅																																	○
大正12年 7月号 住宅																																	○
大正12年11月号 建築世界	名畑良造								○	○																							
大正13年 8月号 建築世界	遠藤於菀							○																									
大正13年10月号 建築画報	三浦元秀										○																						
大正13年10月号 建築画報	峯尾春陽	○																															
大正13年10月号 建築画報	濱岡周忠											○																					
大正13年10月号 建築画報	吉井俊太郎												○																				
大正13年10月号 建築画報														○																			
大正14年1月号17日 東京朝日新聞	山本拙郎	○													○	○																	
大正14年 2月号 建築画報	林 敏明					○											○	○															
大正15年 6月号 新建築	元良	○																	○														
大正15年 7月号 新建築	南 信	○																															
大正15年 7月号 新建築	夕顔																			○													
大正15年10月号 新建築	南 信	○																															
昭和 2年 4月号 建築画報		○																															
昭和 2年 8月号 新建築	岸本 登																				○												
昭和 2年11月号 新建築																						○											
昭和 2年12月号 新建築																							○										
昭和 3年 8月号 新建築		○																					○										
昭和 4年 4月号 新建築	南 信	○																						○									
昭和 4年 4月号 新建築	貞永直義																							○									
昭和 5年 9月号 建築雑誌																								○									

2. 「ライト式」および関連する用語

下田菊太郎が、「ライト式」を使用した後には、「ライト式」もしくはそれに準ずる用語に多様な使用が、見られるようになる。

「ライト式」の用語は、ライトの設計になる作品に対して「ライト式」と呼ぶもののほか、「ライト式建築」などいくつかの用語が見られるようになる。また、ライト風を表す用語や、「遠藤氏の…」 「立体」など、「ライト式」と同様、あるいは同じような形態や形式を持つ建築を示す意味で使用される用語も多く現れた。

例えば、山本拙郎⁹の「住宅建築の宿命 遠藤氏の個展をみて」(『東京朝日新聞』大正14年1月17日)には、「世間ではライト式と呼んでいるが、今日ではもう遠藤氏の様式と言ってもいい」とある。また、『建築世界』大正10年3月号には、「フランク・ロイド・ライト氏の設計になるライト式と銘打つ最新式の立体建築と称する物」とある。このように、「遠藤氏の様式」あるいは、「立体建築」という表現も、当時は「ライト式」の用語と同様の意味を持って語られていた。このことから本稿では、「ライト」の名前を用いた「ライト式」の用語と共に、これらの用語についても、いわゆる「ライト式」に準じた用語として扱っている。

[表1]にみられるように、「ライト式」あるいはそれに準じた用語の種類は32、使用件数は、53件確認できた。

中でも、使用例が最も多いのは、「ライト式」(1)で、12件(23%)あり、その使用は、大正8年から昭和4年までの大正期および昭和初期の全期間に及んでいる。

「ライト式」(1)に、ライト式の言葉を含む「ライト式建築」(6)、「ライト式の建築」(16)、「正真のライト式」(18)、「ライト式の板張り」(20)、「ライト式の住宅」(21)の5種類を合わせると、使用例は、18件(34%)となる。

二番目に多い使用は、「立体建築」(25)で、5件(9%)認められる。その使用年代は、大正9年から大正12年7月までの大正期である。また、「立体建築」(25)に、立体を含む「立体的新建築」(24)、「建築は立体である」(26)、「立体主義の手法」(27)、「立体派の手法」(28)、「立体的有機体」(29)、「立体的建築観の下に設計」(30)、「立体式」(31)、「立体式建築」(32)を加えた9種類の言葉は、15件(28%)あり、大正9年から大正12年7月まで使用されていることが分かる。この期間は、帝国ホテル起工の翌年から竣工前までの期間に相当する¹⁰。

三番目に多い「ライト風」(22)は、3件(6%)の使用が認められる。使用年代は、昭和2年から3年である。また、ライト風を含む「ライト風の家」(19)を加えた4件(8%)は、大正15年から昭和4年までの、昭和初期に使用されていたことが分かる。

「ライト式」(1)と「ライト風」(22)の使用は、合計15件(28%)あり、それに「ライト式建築」(6)、「ライト式の建築」(16)、「正真のライト式」(18)、「ライト式の板張り」(20)、「ライト式の住宅」(21)、「ライト風の家」(19)を合わせた使用例は、22件(42%)ある。

なお、その他の言葉については、大正期に使用されていたことが分かる。

3. 「ライト式」および関連する用語の使用例

32種類の「ライト式」の用語が、どのような意味をもって使用されていたか、について掲載年代を追って考察すると次のようになる。

大正8年:「ライト式」(1)

ライトと旧知であった下田菊太郎は、「帰朝所感」¹¹の中で、帝国ホテルが、日本や欧米の様式ではなく「一個のライト式に拠らんとする」ことを不可解としている。また、「今は広くライト式とでも云ふ様になった」とし、ライトの作風に対して「ライト式」という表現を使用している。

大正9年:「立体的新建築」(24)、「立体建築」(25)

「立体的建築」(24)は、ライトの弟子の遠藤新が、建築を論じた小文の表題である。文中には「立体的建築観が正しい」との表現がある¹²。また、「立体建築」(25)は、山本拙郎が「二人の建築家とその作品」と題し、後藤慶二の遺作である「東京区裁判所」と遠藤新の「帝国ホテル仮館」について述べたもので、その中で、帝国ホテルについては、「ライト氏とそして遠藤氏の立体建築」と記している¹³。それは、ライトと遠藤の帝国ホテルの作風を「立体建築」という言葉で表したものと考えられる。

大正10年:「ライト式」(1)、「立体建築」(25)、「建築は立体である」(26)

「ライト式」(1)および「立体建築」(25)は、帝国ホテルについて、「建築の様式は、(中略)ライト式と銘打つ最新式の立体建築と称する物」¹⁴と記した、帝国ホテルに対して使用された言葉であることが分かる。また、帝国ホテルについて、「建築はライト式と称して頗る美術的の建築である」と、述べている記事もある¹⁵。「建築は立体である」(26)は、遠藤新が設計した、櫻風会アパートメントについて、遠藤自身が「今やつと形の世界、空間の世界に入ってまいりましたが、私はここで建築は立体であると申すのであります」¹⁶と、ライトの弟子である遠藤の作風を説明した表現である。

大正11年:「ライト式」(1)、「恩師ライト氏の創案」(2)、「ライトの流れを汲んだ建築」(3)、「ライト派建築家」(4)、「ライト屋」(5)、「ライト式建築」(6)、「ライト張り」(7)、「立体建築」(25)、「立体主義の手法」(26)、「立体派の手法」(28)、「立体的有機体」(29)

「ライト式」(1)は、「ライト張り」(7)と共に使用されている。「気の早い処でライト式」という、流行の兆しを示すと考えられる意味での使用が見られる。また、「ライト式は今の処専売特許であり」と使われ、ライトの建築に冠せられた言葉とも受け止められる。あるいは、「ライト式は本国米では強ちライト式のみでなくライト張りは充分既に或種の人々の様式となっている」とあることから、ライトの作風に類似したものをライト張りとして表現していることがわかる。

「恩師ライト氏の創案」(2)は、「立体建築」(25)と共に高島司郎¹⁷が使用している。「こゝに生まれ出たのが、立体建築です即ち恩師ライト氏の創案せる独歩の主義主張」と、ライトの考案した考え方を説明したものである¹⁸。

「ライトの流れを汲んだ建築」(3)は、「立体派の手法」(28)とともに使用されている。「ライト氏の流れを汲んだ建築が此頃おり

おり東京市内に見られます。四谷信濃町の犬養氏の邸宅や、音楽家の多氏兄弟の東中野の新居などがそれであります。」と、遠藤新設計の犬養邸¹⁹を例に上げ、多邸の解説をしている²⁰。また、「天井も窓も電燈も暖炉もすべて立体派の手法に由って居ます。」²¹と、ライトの流れを汲んだデザイン手法を述べている。

「ライト派建築家」(4)および「ライト屋」(5)は、「ライト氏の芸術は、氏の追従者に於て、模倣となり、伝統踏襲となり、やがて生命のない形骸のつぎはぎとなる恐れがある。(中略)畢竟ライト氏の賛嘆は、ライト氏への追従と区画せねばならぬ。ライト派建築家にして、もしも、この区画を忘れる時は、彼は終に、単なる『ライト屋』となり了るであらう。」と、「ライト派建築家」にしても、追従者は、模倣となり形骸化しかねないことを予測しており、追従者を「ライト屋」と表現している²²。

「立体建築」(25)は、高島司郎が、「所謂立体建築と名づけられたもので一口に云へば建物を自然の一部と考へて自然をお手本とし、」²³と、ライトの建築に対する考え方を説いたものと考えられる。また、同じく高島司郎は、「こゝに生まれ出たのが、立体建築です即ち恩師ライト氏の創案せる」²⁴と、「立体建築」は、ライトの創案した建築であるとしている。

「立体主義の手法」(27)は、帝国ホテルについて「東洋趣味に一種の新鮮さを感じるのは、設計者が、東洋芸術の原始的精神にさかのぼっていて、その上近代芸術の構成主義や立体主義の手法まで取り入れているからだ。」²⁵と述べ、「立体主義の手法」をライトのデザイン手法の一つとして扱っている。

「立体的有機体」(29)は、高島司郎が、計画案の説明で、「建築についての言葉に『軒先から地形まで』と云ふのがあるネ。建物を立体的有機体と考へないとこんな味言葉は出ないと思ふ。」と、設計依頼者に答えている²⁶。

大正12年:「ライトの風貌」(8)、「ライトの様式」(9)、「立体建築」(25)、「立体的觀念の下に設計」(30)、「立体式」(31)、「立体式建築」(32)

「ライトの風貌」(8)と「ライトの様式」(9)は、同時に使用され、名畑良造が「ライトの風貌及ライトの様式及其理想に就いて多くの缺點はあると思ふ、」²⁷とライトの建築について述べている。

「立体建築」(25)は、「立体式」(31)と併用して、高島司郎が使用している。「南国佳和 文化倶楽部 郷里の友人達に贈る立体建築の習作」と題した文中で、「立体建築の特質」は「自由に建物の占有して居る空間を利用したもの故、はっきりと何階かを定めることはむづかしい、」と述べ、スキップフロアの説明をしている。また、「立体式とでも名付け様か。吾々はこれを平常、立体建築と云ひこれこそ眞の建築であると信じて居る。」ともある。加えて、「さる人が、先年まで丸の内帝国ホテルを設計中の恩師ライト氏を訪ねて」ともあり²⁸、帝国ホテルに類する中間階を用いた文化倶楽部の設計に対して「立体建築」の言葉を使用しているものと考えられる。

「立体的觀念の下に設計」(30)は、高島司郎が、習作について説明したもので、「特徴、すべて立体的建築觀念の下に設計せられ(中略)一貫した主張の下に一つの有機体として設計」したと述べている。また、「立体式」(31)は、住宅写真(笹塚中村邸)の説明に「清

新な立体式の印象が遺憾なく味はれませう。」と書かれている²⁹。

「立体式建築」(32)は、住宅(笹塚中村邸)について、「造り付けのベンチ」「造付の腰掛」「電燈の装飾にも家全体と同じ様式」など室内の説明があり、「全体から見て立体式建築の一例です。」としている³⁰。また、他の住宅(中野八田邸)では、「小塚邸と同じ様態の立体建築の一例」と使用されている³¹。

大正13年:「ライト式」(1)、「ライト張り」(7)、「ライト氏流」(10)、「遠藤氏の創作」(11)、「ライトまがい式」(12)、「帝国ホテル式」(13)

「ライト式」(1)は、ここでは、バラック建築について述べたもので、「ライト式の銀座ホテル、西村貿易店、(中略)等を推します。」と、遠藤新の作品を「ライト式」と称している³²。

「ライト張り」(7)は、「ライトしに与ふるの書第四信」の中で使用され、執筆者である遠藤於菟は、「震災後の建築を見られたならば『ライト張り』(かく称へらるゝにより暫く夫に従ふ)建物の簇出せるに一驚を喫せらるゝならん。併し其多くが似て非なるものにしてあなたの外形を模倣して(中略)皮相の観を無したるものに過ぎず」³³と述べ、「ライト張り」をライトの作風に模した表面的なものと考えている。

「ライト氏流」(10)は、「莫とした記憶から、バラック装飾図案社のものと、ライト氏流の建物以外に、特にこれといつては別に何も建たなかつたやうに思つて居ます。」³⁴と、バラックの印象を語っている。「遠藤氏の創作」(11)は、濱岡周忠が、「ライト氏を祖述されてみるとはいへ(中略)建築の全量には特に建築的な美が感じられます。それはもう遠藤氏の創作として多くの未来を持つやうに考へられます。それは形骸だけの模倣ではない本物の感じです。」³⁵と、遠藤新の作風について述べている。「ライトまがい式」(12)は、バラック建築について「ライトまがい式が比較的皆よいと思はれた。」と、ライトを模倣した、いわゆる「ライト式」の印象を語っている³⁶。「帝国ホテル式」(13)は、「日比谷の松月堂……帝国ホテル式によつたものですが、レストランとしては、ふさはしい出来かと思ひます。」と、バラック建築の中の、ライトの帝国ホテルの影響を受けたと思われる建物を称した表現と考えられる。

大正14年:「ライト式」(1)、「ライト式建築」(6)、「遠藤氏の様式」(14)、「遠藤氏の型」(15)、「ライト式の建築」(16)、「ライト擬ひの建築」(17)

「ライト式」(1)、「遠藤氏の様式」(14)、「遠藤氏の型」(15)については、山本拙郎が、遠藤新の個展を見て、遠藤を評した文中に使用している。「帝国ホテルに見るような、(中略)特殊な建築型を世間ではライト式と呼んでいるが、今日ではもう遠藤氏の様式と言ってもいいと意う。(中略)自由無碍なその平面の組立から、特異な構造、明快な意匠まで、そこに全然新しい遠藤氏の型を完成している。」といい、帝国ホテルを模した建築を「ライト式」と呼び、「自由学園」と「赤倉温泉ホテル」を例に上げて、「遠藤氏の様式」あるいは「遠藤氏の型」と、遠藤の作風を呼んでいる³⁷。

「ライト式建築」(6)、「ライト式の建築」(16)及び「ライト擬ひの建築」(17)は、同一文中に見られ、「ライト式擬ひの建築が私の言ふところのライト式建築であります。(中略)ライト式の建築と

それを追ふ「ライト式建築」と、言葉を使い分けている。つまり、ライト式建築という言葉は、偽物を表す用語と考えられる。また、「ライト式建築は其後に住宅に盛んに応用されてきました。」³⁸とある事から、「ライト式」の流行を述べたものと考えてよからう。

大正15年：「ライト式」(1)、「正真のライト式の家」(18)、「ライト風の家」(19)

「ライト式」(1)は、3件の使用が見られる。一つ目は、「ライト式なんて『式』がついて来る様になると、(中略)つい偽物が出たがったりする。(中略)真似でない様に見せ渡くて、小さな自分をチョクチョク出して仕舞う。蓋し似て非なるライト式の多い所以である。」³⁹と、偽物のライト式が多いことを述べている。二つ目の場合は、雑誌の読者が、設計相談で、「ライト式の様式を望む」と、ライト式を使用している。応答側の南信は、「ライト式といふ言葉が何時頃からか使はれる様になりまして、此の頃では一つの形式を持った建築を分類するのに便利な言葉となっている様ですが、」と答えている⁴⁰。三つ目も、別の設計相談であり、読者は、「様式は出来ることなればライト式に」と、「ライト式」を望んでいる。これに対して、南信は、「所謂ライト式と称するものに近い形をこしらへて見ました。」と答えている⁴¹。このことから、建築関係者でない読者の間にも「ライト式」が、一般化して使用され、建築の分類を示す言葉「様式」として使われていることが分かる。

「正真のライト式の家」(18)は、南信設計の菅野真湛郎についての評論で、「スッキリとした正真のライト式の家」と使用されており、遠藤と南の二人の作品は、「ライトと多少異なった味があるように思はれる。」とも述べている⁴²。

「ライト風の家」(19)は、住宅図面の解説文の表題として、「雨の六月、ライト風の家」と使用されている。また、解説には、「深い軒の出、突出したバルコニー、壁体の巧な凹凸、広く採った高めの窓、美しい花鉢(中略)玄関を深く入り込めたところ、暖炉を背にして居間をホールから隠したところ地下階段の裏口の採り方など、ライト氏得意のプランであります。」と書いている⁴³。このことは、この建物の作風を挙げて、ライトと同じように、設計したと述べているものと考えられる。

昭和2年：「ライト式」(1)、「ライト式の板張り」(20)、「ライト式の住宅」(21)、「ライト風」(22)

「ライト式」(1)は、『ライト作品集』(洪洋社)の広告で、「今や、素人と雖も『ライト式』名を知らざるなし。」⁴⁴と、「ライト式」が、一般化した呼び名として使用されていたことが、うかがえる。

「ライト式の板張り」(20)は、応募設計案の設計概要の仕様に「一階部分は大壁にしてライト式の板張り、」と書かれている⁴⁵。

「ライト式の住宅」(21)は、住宅についての展覧会の作品目録に、作品名称として「ライト式の住宅」とつけられている⁴⁶。「ライト風」(22)は、「東西両大学造型美術展覧会を観る」の記事に、「京大側の夫は、ライト風、独乙近世式、構成派等、」⁴⁷とあり、「ライト風」を様式の一つとして扱っていることが分かる。

昭和3年：「ライト式」(1)、「ライト風」(22)

「ライト式」(1)は、「第三回懸賞競技選評」の記事に、「バンガローやライト式には飽いたが、」⁴⁸とあり、「帝国ホテル」をはじめ、

「自由学園」「音楽家の多氏の家」「笹塚中村邸」「中野八田邸」「銀座ホテル」「菅野真湛郎」など多くが建設された、「ライト式」の流行の衰退を示すと考えられる表現の中に、「ライト式」の使用が見られる。また、同じ記事中に、「ライト風」(22)が、「ライト風を加味した折衷様式とでも言ふべきものである。」⁴⁹と使用されている。それは、部分的にライトの作風を模した作品であるとの表現と考えられよう。

昭和4年：「ライト式」(1)、「ライト風」(22)

「ライト式」(1)は、南信が、亀高邸についての解説文中に使用している。「殆どカネ勾配の南面した斜面(中略)そうした土地でした。これはいかなライト式でも面くらひます。」⁵⁰とし、「ライト式」が、優れたものであることを意味した表現と見ることもできよう。

「ライト風」(22)は、甲子園ホテルについて「関西人士も遠からずして、ライト風のホテルをもつであらう。」⁵¹と、遠藤新の設計した建物に対して、「ライト風」と称していることが分かる。

昭和5年：「帝国ホテルの様式」(23)

「帝国ホテルの様式」(23)は、「京都市美術館建築図案懸賞募集審査報告」の中で使用されている。応募案を4つに分類しており、その一つが、「日本式を基調とせる左記の建築を模倣せるもの」である。ここには、6つの建物が列記しており、最後に「東京帝国ホテル」があげられている。このあとに、「上掲四種の内に於て帝国ホテルの様式は最も多く模倣者を出し之については明治神宮宝物館一等当選案を模倣せるものが多かった。」⁵²と述べている。

4. 「ライト式」という用語の使用方法の変遷と意味

帝国ホテルの出現とともに現れた、「ライト式」の用語について雑誌や新聞に記されたものは、確認できたものだけでも大正8年から昭和5年までの大正期から昭和初期にかけて、32種類の用語と、53件の使用例が認められた。また、32種類の内、「ライト」の名前を用いた「ライト式」の用語は、18種類(56%)、「立体」を用いた「ライト式」の用語は、9種類(28%)、「遠藤氏の…」を用いた「ライト式」の用語は、3種類(10%)あり、「帝国ホテル」を用いた用語は、2種類(6%)が確認できた。

使用例が最も多かった用語は「ライト式」(1)で、12件(23%)あり、「ライト風」(22)3件(6%)含めて、大正期から昭和初期の全期間に亘り使用されていた。また、「立体」を含む用語は、大正8年から大正12年までの、大正期にのみ使用例が見られた。

また、「ライトの風貌」(8)、「ライトの様式」(9)、「ライト氏流」(10)、「遠藤氏の創作」(11)、「ライトまがい式」(12)、「帝国ホテル式」(13)、「遠藤氏の様式」(14)、「遠藤氏の型」(15)、「ライト式の建築」(16)、「ライト擬似建築」(17)、「正真のライト式の家」(18)、「ライト風の家」(19)の12例(23%)は、大正12年の関東大震災の後から、大正15年までの期間使用されていた。

「ライト式」の用語は、初め、ライトの作風あるいは、帝国ホテルの建物について用いられたが、ほぼ同時期に、ライトの弟子の遠藤新の建物についても「立体建築」といった言葉が、冠せられた。帝国ホテルが、一部開業した⁵³大正11年には、「ライト屋」「ライト張り」というような、ライトの作風の模倣を意味する言葉が現れ

た。大正12年には、「ライトの様式」「立体式」「立体建築」など、ライトの建築に対する考え方を加味した言葉の使用が見られた。また、関東大震災後のバラック建築に対しては、「ライト張り」「ライトまがい式」の、ライトの表面的な模倣を意味する用語の使用が見られるようになった。その一方で、大正14年、大正15年には、「遠藤氏の様式」「正真のライト式の家」の、ライトの弟子の作風をライトの作風と区別して扱う言葉も出現した。また、昭和2年には、「素人と雖も『ライト式』名を知らざるなし」と、一般化した様式名として使用される一方で、「ライト式の板張り」というように、材料の使用方法を部分的に真似た建物にも、「ライト式」の用語が使用されていた。以上、種々の「ライト式」の用語は、大正15年から昭和初期にかけて「ライト式」「ライト風」の言葉に収束していった。

おわりに

ライトの設計による、帝国ホテルの建設にともない、大正8年に現れた「ライト式」の用語は、はじめは、ライトの建築を示すものであったが、同時に、ライトの弟子の作風にも用いられた。

やがて、ライトの作風を模倣した建物に対しても、使用され始め、関東大震災後には、材料などの表面的な模倣に対しても、いわゆる「ライト式」の用語が使用された。また、一方では、「ライトと多少異なった味」での「本物」として、ライトの弟子にあたる遠藤新や南信の作風にも、「ライト式」の用語が冠せられた。

大正期から昭和初期にかけて、ライト風の建物が幅広く流行し、「ライト式」の用語は、徐々に、弟子たちの「正真のライト式」と表層的な模倣に対して、意味を違えて使用されたものの、一つの様式を示す言葉として、建築関係者以外にも使用される用語となった。

「ライト式」の用語は、大正15年から昭和初期にかけて、「ライト式」と「ライト風」という言葉に収束していくが、この現象は、わが国の建築の世界では、ライトの作風の特徴を見ることが、もはや一般化したことを示すものと考えられる。

1 谷川正己編著『図面で見えるF.L.ライト 日本の全業績』pp.5「ライトの日本での設計業績12件」とある。なお、Department Store (B.B.Pfeiffer-List of Projects by Assigned Number, Anthony Alofsin(edited)-Frank Lloyd Wright, An Index to the Taliesin Correspondence, Garland Publishing, Inc., vol.1, 1988) については、ライトの設計かどうか確定されていないが、これを含めれば13件になる。また『東京朝日新聞』大正11年8月20日の5面に「日比谷三角地帯に新理想郷を描く…設計はライト氏が 独創の置きみやげ」という記事があり平面および立面スケッチの掲載がある。平面スケッチにはFLWと見られるサインがある。そして、「日比谷三角地帯設計想像図」『建築の日本』第1巻第2号(1924年6月)に「フランク・ロイド・ライト」の記述、「日比谷三角ビルディング計画図」『建築世界』第20巻第11号(1926年11月)には「フランク・ロイド・ライト・遠藤新建築創作所」の記述がある。

2 武田五一 イリノイ州カンカヒー市にあるワーレンヒツツク氏の住宅「萊都氏案」『新建築』第1巻第1号大正14年8月 pp.3 武田はヒコック邸について、ライトの作風を次のように述べている。「常用手段として其考案された住宅は寢室浴室便所台所以外の室は開放されて居て通路の邪魔になり且つ開閉の邪魔臭い扉を付けずしかも何れも見透しが出来ないで至る所一寸隠れる場を取ってある手法の巧みさには関心される。」/「居間「アルコーブ」」「取り付け椅子」「南方の大きい窓を明け窓の外には露台」「直線模様のレストラン」「居間の北は凹壁」/「食堂」「本棚と置棚が作り付け」「取り付け長椅子」「取り付け本箱」/「窓の大なること軒の出で居ること屋根勾配の緩いことは全く日本建築と似ている」

3 『建築雑誌』第330号大正3年6月 pp.329

4 『建築雑誌』第331号大正3年7月 pp.334

5 1866~1931 近江栄『光と影 蘇る近代建築史の先駆者たち』相模書房1998 pp.108~114

6 帝国ホテル『帝国ホテル百年史1890-1990』pp.957

大正8年(1919)9.1 新ホテル建設工事起工(動力室から着工)

7 『帰朝所感』『建築新報』第1巻第8号大正8年8月 pp.34~35

8 サリバンがフィラデルフィアで勤めた事務所Furness&HewittのHewittと考えられる。Hans Frei“Louis Henry Sullivan”1992 ArtemisVerlags-AG pp.13

9 1890~1944 山本拙郎(内田青蔵編)『拙先生絵日記』住まいの図書館出版局1993、早稲田大学理工科建築学科本科卒業大正6年3月(1917)『稲門建築会名簿』1994 早苗会部会 pp.21

10 帝国ホテル『帝国ホテル百年史1890-1990』pp.957 pp.959

大正8年(1919)9.1 新ホテル建設工事起工(動力室から着工)

大正12年(1923)8.末 新ホテル(ライト館)全館落成

9.1 新館落成披露準備中に関東大震災発生(新館は被害をまぬがれるも、別館は復旧困難となり取り壊し)

11 『建築新報』第1巻第8号大正8年8月 pp.34~35

12 『建築評論』第2年第3号大正9年4月 pp.15

13 『建築評論』第2年第6号大正9年7月 pp.29~30

14 『建築世界』第15巻第3号大正10年3月 pp.59

15 『建築世界』第15巻第12号大正10年12月 pp.57

16 『家庭週報』大正10年6月10日

17 早稲田大学第8回卒業生(大正9年3月23名)『稲門会建築会名簿』

1994 稲苗会 pp.22、『住宅』第7巻第5号大正11年5月をはじめ、『住宅』に設計作品が掲載されている。

18 『住宅』大正11年8月号 pp.8

19 野村治輔 設計者は自然の創作だといふ「変わった家」の印象【犬養木堂氏の新邸を観て】『サンデー毎日』第1年第3号大正11年4月16日 pp.6

20 目白千登作『住宅』第7巻第10号大正11年10月 pp.2

21 目白千登作『住宅』第7巻第10号大正11年10月 pp.4

22 『建築世界』第16巻第10号大正11年10月 pp.1~2

23 『住宅』第7巻第6号大正11年6月 pp.6~7

24 『住宅』第7巻第8号大正11年8月 pp.8

25 森口多里『建築画報』第13巻第9号大正11年9月 pp.12

26 『住宅』第7巻第10号大正11年10月 pp.40

27 名畑良造『建築世界』第17巻第9号大正12年11月 pp.21

28 『住宅』第8巻第4号大正12年4月 pp.27・29・30

29 『住宅』第8巻第6号大正12年6月 絵塚塚中村邸

30 『住宅』第8巻第6号大正12年6月 pp.2~4 塚塚中村邸

31 『住宅』第8巻第7号大正12年7月 pp.2 中野八田邸

32 峯尾春陽(印画家)『建築画報』第15巻第10号大正13年10月 pp.40

33 『建築世界』第18巻第8号大正13年8月 pp.6

34 三浦元秀(建築家)『建築画報』第15巻第10号大正13年10月 pp.39

35 『建築画報』第15巻第10号大正13年10月 pp.41~42

36 吉井俊太郎(建築家)『建築画報』第15巻第10号大正13年10月 pp.42

37 住宅建築の宿命 遠藤新氏の個展をみて『東京朝日新聞』大正14年1月17日

38 林 敏明 ライト式建築に対する雑感『建築画報』第16巻第2号大正14年2月 pp.7~8

39 菅野真湛氏の住宅『新建築』第2巻第6号大正15年6月 pp.9 南信設計

40 設計相談『新建築』第2巻第7号大正15年7月 pp.23

41 設計相談『新建築』第2巻第10号大正15年10月 pp.34・35

42 菅野真湛氏の住宅『新建築』第2巻第6号大正15年6月 pp.8・9 南信設計 評者は、元良、岡田、吉岡3人で、この部分は、元良が述べている。

43 夕顔『新建築』第2巻第7号大正15年7月 pp.32

44 『建築画報』第18巻第4号昭和2年4月広告(後の3)

45 岸本 登『新建築』第3巻第8号昭和2年8月 pp.38

46 『新建築』第3巻第11号昭和2年11月3

47 『新建築』第3巻第12号昭和2年12月 pp.16

48 『新建築』第4巻第8号昭和3年8月 pp.54

49 『新建築』第4巻第8号昭和3年8月 pp.55

50 南信『新建築』第5巻第4号昭和4年4月 pp.28

51 貞永直義 フランク・ロイド・ライト氏の作品に於ける享樂的思想の展開『新建築』第5巻第4号昭和4年4月 pp.51

52 『建築雑誌』第44輯第537号昭和5年9月 pp.118

53 帝国ホテル『帝国ホテル百年史1890-1990』pp.958

大正11年(1922)7.1 新ホテル(ライト館)一部開業